

ろその時代に適應する教義を開顯、組織、強調、布衍したものであつて、所謂鸞緯導空辨然諸師の思想内容を更に深く掘下げたものが陀師教學であり、時機に契える教學であるから、あくまでも淨土教義の本質に立脚する所説として重要視し、依馮とせねばならないのではなからうか。

## 註

- |      |          |                |
|------|----------|----------------|
| (1)  | 無量經釋第一   | (淨全九の三二四～五頁)   |
| (2)  | 觀經玄義分    | (淨全二の三頁)       |
| (3)  | 淨土二藏二教略頌 | (淨全十二の一～五頁)    |
| (4)  | 頌 義第十一   | (淨全十二の一六上頁)    |
| (5)  | 集疑同決集    | (淨全十二の八四九頁)    |
| (6)  | 教相十八通    | (淨全十二の七四五頁)    |
| (7)  | 〃        | (淨全十二の七四五頁上～下) |
| (8)  | 教相十八通    | (淨全十二の七四五頁)    |
| (9)  | 〃        | (淨全十二の 〃 下頁)   |
| (10) | 〃        | (淨全十二の 〃 )     |
| (11) | 頌 義第三〇   | (淨全十二の三四二頁)    |

## 行動問題児とその家庭機能について

社會福祉學科社會福祉學專攻

藤 堂 良 純

あいかわらず、少年非行の問題が世間の注目を集めています。あるときは恐ろしいあるときは悲しい少年少女の非行が、毎日のように新聞の社會面を暗くしています。それをみて「健全なおとな」たちは、「今どきの若いものは……と」マユをひそめますが「正常な子ども」でもふとしたことがきつかけとなつて、容易に非行の仲間入りをするという事實を忘れがちです。それが「正常」と「非行」の微妙なわかれ道にたたされた少年少女を、私たちの手のとどこかぬところへ追いやつているのかも知れません。

「家庭で、未つ子の私は、あまえて育ちました。父も母も、そして義兄や姉たちもみんな親切でしたが、だれも私をしきつてくれなかつた。思春期になつた私には、それがすごく寂しかつた。そして、私のいうことはなにも聞かず、親の愛ばかりをおしつける大人の態度に疑問を感じた。なぜ私の心を理解してくれなかつたか？ なぜ私をしきつてくれなかつたのか……」A子(十七)

「父は酒を飲むと人がかわるんです。外では仲良しの夫婦で通っていたけれど、家ではしよちゆう母をなぐつたりけつたりの大ゲンカ。親の顔をみるのもいやになつたんです。」  
中学生のB子(十四)

「大好きだった父に女ができたんです。二人の母をもつた私は、もう父を父と思えなくなつた。」C子(十五)

「人の顔をみると勉強、勉強と、子どもの気持ちや少しもわかつてくれなかつたのです。」D(十七)

A子——一見なに不自由ないとみられる中流家庭に育つた彼女は、非行の原因を大人たちが理解してくれなかつたからだという。

B子——親の不信から家出して不良のグループにはいつたと語る。

C子——おなじく親の不信でも、父の注意をひくために悪いことをしたという、父に対する恋愛的感情。

D——進學競争の犠牲となり、逆に親の過分な期待が自分を安易な横道へそらせたと語る。』

——京都新聞、一九六五、六、二九

「非行少年は訴える」

京都少年鑑別所座談會より

私たちは、このような青少年少女に出合うやすぐさま、「非行少年だ」「非行少女」とあたまたから、彼等をあたかも異様な存在として見つめます。しかし、彼女達にも社會に主張しよう

とする根據はもつてゐるのです。

では、「非行」とはどのような行動なのでしょう。非行は人間の行動の一部であることはいうまでもないことです。行動は、自我と環境體制の力動的表現、つまりそれは人と環境との相互交渉、からみあいからでるエネルギーの表現であります。その表現が大多数の普通の人びとにおけるように正常であり、社會的に許されたものである場合には、それは正常の行動であるといふことができます。しかるに多くの普通人からみて、いちぢるしく逸脱した行動を異常行動または不適應行動といわれまたこれを問題行動ともいい、問題行動を持つ子どものことを行動(的)問題児といわれるのです。

この行動問題は大ざっぱにいえば、自己の現在または將來の發達にとつて有害なる行動であるところの非社會的行動と、正常なる他人または健全なる社會にとつて有害なる行動をおこす反社會的行動との二種類に大別されるのです。そして一般世間でいう「非行少年」とは、これらのうち、後者の場合を指しているのです。

私たちはこれらの問題をもつ子ども、すなわち問題児の判定にあたつては細心の注意をはらわなければなりません。まづ第一には問題児区分のよりどころを何を基準にするのかということであり、第二には判定者がどのような觀點により問題児を判定するかについて各判定員による判定の相違點を検討しなければなりません。それらのための資料として、問題児が問題児になりうる原因、要因というものを追求しなくてはなりません。

しかし、これら行動問題の原因は多種多様であるうえ諸種の要因がいろんな形で互いに作用しあつていて、その機制的究明はかならずしも簡單ではありません。けれどもその要因として考えなければならぬものとしては次のようなものがあげられるでしょう。

遺傳、知能障害、精神病、精神病質、内分泌障害、身體の機能障害と疾患などによる心理的生物的要因。また社會的背景、交友および地域社會、學校などによる環境的要因や、家庭的要求などがあげられるでしょう。

子どもの心身が健全に發達するためには子どもの心理的生理的な諸要求が適度に満たされなくてはならないのです。乳兒期ならびに幼兒期の初めにおいてはそれは家庭において満たされるのです。しかし、その要求は子どもの成長に伴つて社會との關連をもつてくるので、充足の仕方もち社會化されなければなりません。そこで家庭において子どもの要求をすべて一方的に受け入れるのではなく社會的に認められる形で満たしてやる訓練が必要となつてくるのです。子どもが家庭のなかで両親の指導をうけながら、自分のさまざまな要求と社會からの要求とをうまく調節できるようになつた状態を適應できた子どもということが出来るでしょう。それでは、子どものもつ諸要求とはどんなものでしょう。

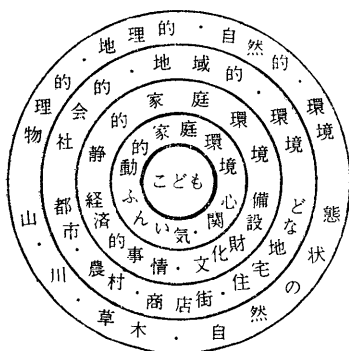
人間の生活に欠くことのできない基礎的な要求を基本的要求とよんでいますが、それを大きくわけると、生理的要求、自我的要求、社會的要求の三つとなります。生理的要求とは人間が

有機体として生命を維持したり身體の安定を確保したり運動したりする要求で、具體的には飢え、かわき、氣温の變化、疲勞苦痛などからのがれようとする要求であり、自我的要求は、心の芽ばえとともにあらわれてくる精神的な要求で、これには、愛情、安定、獨立、新經驗、成就の要求などがあげられます。社會的要求としては子どもの心の世界が家庭という場を越えて發展しはじめると近隣の人や同年の友人との人間關係を中心として、所屬の要求や承認の要求や承認の要求といったものが生れて來るのです。

しかし現實の生活では、子どものもつているこれらの要求がすぐには満たされない場合がありこれらの不満が輕度であつたり一時的である場合には、子ども自身の力で解決することも可能です。また適切な指導をすれば要求不満に耐える力を養うことにもなるでしょう。しかし不満の度が強かつたり繼續する場合には、それは子どもの不合理な行動となつてあらわれてきます。そして直接に原因となつた要求とは無關係の型で行動にあらわれてくるので、おとなは、子どもの表面に出た困つた行為だけをみて罰つしたり、禁止したりしがちです。こうなると本人の不満はさらにつり悪循環に陥つてしまひ、すなわち不適應に陥つた場合には、深くその原因について理解するように努力して合理的な解決で導かなければなりません。しかしそれ以前に子どもの要求を正しく理解して適切な處置をしなければなりません。

家庭には、子どもの要求の大部分がそこで満たされ、適應の

仕方の基礎を身につける大切な環境です。家庭環境が人格的に大きな意義をもつことは、昔より「家より育ち」といわれていることにその一端がうかがえます。ただし漠然とはなく、家庭環境についての科学的な分析によつて、その意義を適確に把握する必要があります。



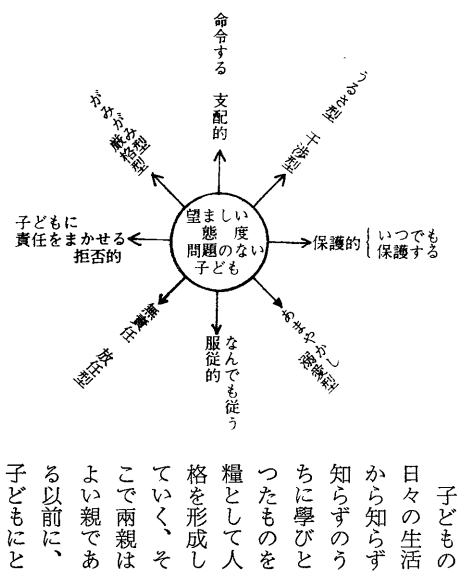
子どもの人格形成に最も強い影響力をもつ環境を圖示してみると上圖のようになるでしょう。

すなわち、まづ家庭のふんい氣や親の態度、生活の仕方などの人間關係を中心とした動的な家庭環境が最も大きな影響力をもち、さらに家庭の經濟事情、職業、設備、家族の人数、文化財などの靜的家庭環境が影響を與えつづいて社會的、地域的な環境つまりその生活の場である住居がどこにあるか、また最後に物理的、地理的自然環境があげられる。このようにして家庭環境は他の環境と比べて子どもに最も直接的な意味をもっていると思われる。

こどもの性格がつくられる基礎には、遺傳的條件のあることは否定できません、がしかし性格はその成長の過程において著

るしく環境の變化、影響をうけて、變化を重ねながら形成されるものです。そこで前述の最も影響力のある人間關係を中核とした動的環境について研究してみたいと思います。

具體的に親のどのような態度が、どのような子どもの性格をつくりやすいかについての研究を紹介してみましよう。サイモンズ(Symonds, P.M.)は多くの子どもの問題の相談をうけそれを解決した經驗をもとにして親の態度について次のような圖式をつくりだしました。



な子どもにとつての成長に精神的なよい榮養源ともいふべきでしょう。

以上、家庭環境の影響力を親の態度や精神的な面に重點をおいて考へてきたのは物質的な面を無視したのではありません。

物質的な面、すなわち靜的環境を子どもの成長にプラスになるように適切に極めることのできるのとは根本は親の態度や心構えにあります。たとえ貧しくとも親の態度によつては豊かな環境を與えてやることもでき、また經濟的好條件がかえつて子どもの成長にマイナスになることもあるのです。離婚、別居、死別などの崩壊家庭や母子家庭、あるいはひとりつ子や大家族が問題とされるのは。そのような條件のもとでは以上にのべた養育態度がそこなわれやすいからなのです。

以上のように、兒童問題は家庭の問題と密着しているといわれます。事實、今日社會的注視をあびている兒童の非行問題にしても、全國の教護院收容兒の非行原因調査をみると約八十パーセントは家庭側に原因があることが明確にされています。△昭和三十三年、厚生省調査—對象は全國教護院收容兒三〇〇六名▽

兒童の育成の場として、近年とくに家庭が重視されてきたのは主として次のような社會的原因によるものと考へられます。

まず第一に、前述の兒童の非行と關連してでありましょう。

戦後家族制度の解體により長い世代にわたつて經驗してきた親の家庭養育の姿勢がくずれ、過度的段階にある混乱のままにある現代つ子と對應している關係から親子關係の失調を生じこれ

が非行の原因となつてゐる現状で、非行防止の觀點から家庭を重視するものありましょう。

第二に、近年における少産少死型への急速な人口構造の轉換や、經濟の高度成長にともなう技術革新により、幼少人口の資質向上に對する社會的期待が大きく、とくに將來の人間形成の基礎ができあがる乳幼児期の養育の重要性が今日問題となつてゐるが、その大部分は家庭養育であり、幼少人口の資質向上をはかる積極的對策からも家庭が問題になるわけでありましょう。

「家庭兒童」とか「家庭における兒童」という觀點から、わが國で問題が提起されたのは、昭和三十三年、第二回國際兒童福祉研究會議が、國際兒童福祉連合 (International Union for Child Welfare) と厚生省の共催で東京で開催されたときからでありましょう。その會議の主議題が「家庭における兒童 (The child in the family)」とついで、當時としては、わが國ではまだ要保護兒童の施設保護對策に手いづばいのところであつたが、すでに先進國では、そのころから兒童福祉對策の當面の重點課題として、家庭に於ける兒童の養育が問題視されてきたようです。

英國では、兒童養育において、とくに母性的養護の重要性を強調した、ジョン・ボールビーの「乳幼兒の精神衛生」(John Bowlby: Mental Care and Mental Health: 1951) が英國國民に非常に大きな影響を與えて、産業革命以前よりその後低下していた家庭の價値を再認識するようになり、これが行政にも具

現して、地方自治體に児童の境遇について調査する法的權限と義務を與えて豫防的ケースワークが積極的に行なわれていると傳えられている。

一方アメリカ合衆國でも一九六二年一月から保健教育福祉省の福祉廳に家庭局が設置されて、家庭に對するサービスとして經濟的援助、醫療保護にとどまらず、専門的社會事業サービスをも行つていとある。

また、西ドイツでは児童の問題と切り離しては考えられないという觀點から、一九五七年から家庭問題省が家庭青少年問題省と改稱されて、非行防止の根底として家庭の大事なことの普及に力を入れ、公私の相談事業の育成につとめ、家庭ぐるみのリクレーション施設の普及など家庭の保護にあたつてゐる、とある。

このように、児童のパーソナリティ形成にとつて、非常に大きな影響をもつといわれる家庭環境の調整などに關する専門社會事業サービスの實施は今や世界的共通の傾向のようであります。